



法学部独自の奨学金制度
「やる気応援奨学金」を利用した
学生の体験をご紹介します



少数民族「アカ族」の民族衣装を着て

タイで16日間の研修を受ける

私は2016年夏、「やる気応援奨学金」の支援を受け、法学部の「国際インターシッピングプログラム」で16日間のタイ研修を行った。

タイは東南アジアの中心国といわれ、日本企業の進出もめざましい。仏教国で首都バンコクには特徴的な寺院が点在し、また、国王の人気は絶大である。穏やかな笑顔で迎えてくれた「ほほえみの国」タイで、当プログラムと当奨学金によって得ることができた、心を揺さぶられた経験を報告したい。

国際インターシッピングとは

法学部が主催する「国際インターシッピングプログラム」は、国際業務への従事や外交政策などの研究に関心がある学生を対象とした1年間の海外派遣プログラムである。受講に際し、書類選考と面接で意欲や英語力の審査があり、スイスの国際労働機関（ILO）、タイ、ベトナム、ミャンマーのなかから研修先が決まる。私は経済成長の著しい国が抱える問題に興味を持ち、タイへ向かうことが決まった。

事前準備としては、本学教授はもとより、他大学教授、国際機関職員、N

GO（非政府組織）職員の方の講義をはじめ、日本国内の関係機関に赴いてのインタビューや、日本語と英語を織り交ぜてのプレゼンテーション、自主的なサブゼミでの調査を進めた。

タイでの経験

まず私たちは担当の先生のゼミ生とともに北タイの地方部へ向かい、児童保護シェルターであるパヤオセンターと、少数民族の住むメータチャン村に滞在した。子どもたちは人懐っこく、彼らを支える大人も笑顔で接してくれた。少数民族の村にはほとんど電力がなく、朝は鶏の声で起きるといふ自然に寄り添った暮らしを経験した。

次に向かったバンコクでは、JICA Aでのインタビューや、本学の協定校であるタマサート大学の教授や学生との交流、タイの中央大学学会の皆さまとの交流などを行うことができた。

さらに、バンコクの国際連合のオフィスでは、タイで猛威を振るい社会問題化したHIV/AIDS問題に関するインタビュー調査を実施した。HIV/AIDSは性的マイノリティの間での感染が高いことが指摘されてきたが、経済格差や薬物乱用も原因の一つとして暗い影を落としている。多く

「ほほえみ」の内側

やのこうたろう
矢野 紘太郎

法学部国際企業関係法学科3年
福岡県立筑紫丘高校出身



少数民族の住むメータチャン村にあるトウモロコシ畑をバックに(本人右端)

の行動主体（アクター）が常にHIV/AIDSのことを意識して活動していることも印象的だった。国を挙げた感染症に対する戦いを垣間見たことで、世界規模の問題として受け止め、現地滞在の意義を強く見出すことができた。HIV/AIDSの親を持つ子どもが保護されている施設であるハッピーホームでは、無邪気に遊ぶ子どもの声に胸が絞めつけられた。

また、経済格差も身をもつて感じた。バンコクの路上にはたくさんの方が座り込んでいるのだ。そのなかに「150」と書いたぼろぼろの段ボールを持った小学生くらいの男の子が座っていた。中年男性と話し込んでいたその男の子を再び見かけたのは、中年男性のバイクの後部座席で寂しそうな目をして去っていく姿だった。生活のためにこのような手段で彼らはお金を稼いでいる。今でもバンコクの喧騒とともに思い出すのは、あのときの彼の瞳だ。成長社会に取り残された子どもが存在に気づき、彼らが安心して暮らせる世の中をつくっていかなければという使命感を強く抱いた。これは、その後に都市政策について研究するきっかけとなった。

おわりに

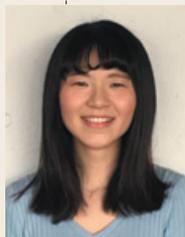
実は、このタイ研修が初めての海外渡航だった。小さいころから外国語に興味を持ち、世界の動向にアンテナを張っていた、つもりだった。今やどこにいても世界中のニュースや映像に触れることができる。しかし、目に飛び込む現実から抱くイメージや先入観は自分勝手に傲慢なふるまいだったと痛感させられた。まさに「百聞は一見にしかず」である。冷静に現状をとらえ、現地の人々の感覚に寄り添い、学ぶことが今の私には不可欠であると気づいた。「ほほえみ」の内側にも思いを寄せる必要があるのだ。

帰国後は各研修先での成果を共有し、体験を踏まえて調査の方向性を一部変更するなど、「肌で感じる」ことの大切さを実感した。1年をかけた「国際インターンシッププログラム」の集大成として、英語でのレポートも完成させた。そして、自分自身の進みたい道が明確になった。この稀有な経験ができたのも「やる気応援奨学金」のおかげだと身にしみて感じている。当奨学金を支えてくださっている皆さま、ご指導いただいた先生方に心から感謝を申し上げます。

ご挨拶

法学部事務室

庄野 斐子



2 016年7月1日付の人事部異動で、入学センター事務部入学企画課から法学部事務室に異動して参りました。庄野 斐子と申します。今回は貴重な誌面をお借りして、私の自己紹介と「アカデミック・アドバイザー」制度についてお伝えしたいと思います。

私は、中央大学法学部国際企業関係法学科を2013年3月に卒業し、その後ご縁があつて本学職員となり、今年で5年目となります。入学企画課では、受験生へ本学の魅力を伝える業務に携わつて参りましたが、法学部事務室に配属となり、大学の魅力を伝える立場から、その魅力を構築する立場に身を置くことで、また違ったやりがいを感じております。学生と接する機会も増え、将来の夢に向かって努力してい

る学生の姿を見てみると、学生のために働ける喜びを改めて感じております。ご子女の学生生活が充実したものになるよう精一杯ご支援させていただきますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

さて、7月に入って、1年生は新生活にも慣れてくる一方で、学修面や生活面で疑問や不安を感じることもあるかもしれません。法学部には、すべての1年生に対して、担当教員がクラス担任のように親身に学生生活の相談に乗る「アカデミック・アドバイザー」制度というものがありません。ほとんどの場合、教員と学生の距離が近い少人数の授業を受け持つ教員が担当教員になるので、学生も相談しやすいのではないかと思います。お気軽にご利用いただければ幸いです。